

# 第148回埋蔵文化財セミナー 資料

令和4年2月26日(土)

# 都をつくる

恭仁宮と長岡京



恭仁宮跡第102次調査



「旨」字を陽刻した軒丸瓦  
(長岡京右京第1177次調査)



長岡京跡右京第1241次調査

第148回埋蔵文化財セミナー

「都をつくる－恭仁宮と長岡京－」

日 程

- 13時30分 開会あいさつ  
京都府教育庁指導部文化財保護課長  
森 正
- 趣旨説明  
筒井崇史
- 13時40分 報告1 「恭仁宮跡の最新発掘成果」  
京都府教育庁指導部文化財保護課  
主任 桐井理揮
- 14時30分 休憩
- 14時40分 報告2 「長岡京の大路に面した宅地の調査」  
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター  
調査員 松井 忍
- 15時30分 休憩
- 15時40分 報告3 「近年発見された長岡京内の大規模宅地について」  
公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター  
事務局長 中島皆夫
- 16時30分 閉会

主 催 京都府教育委員会  
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター  
後 援 長岡京市教育委員会

会 場 長岡京市中央生涯学習センター メインホール



# 恭仁宮跡の最新発掘成果

京都府教育庁指導部文化財保課主任  
桐井理揮

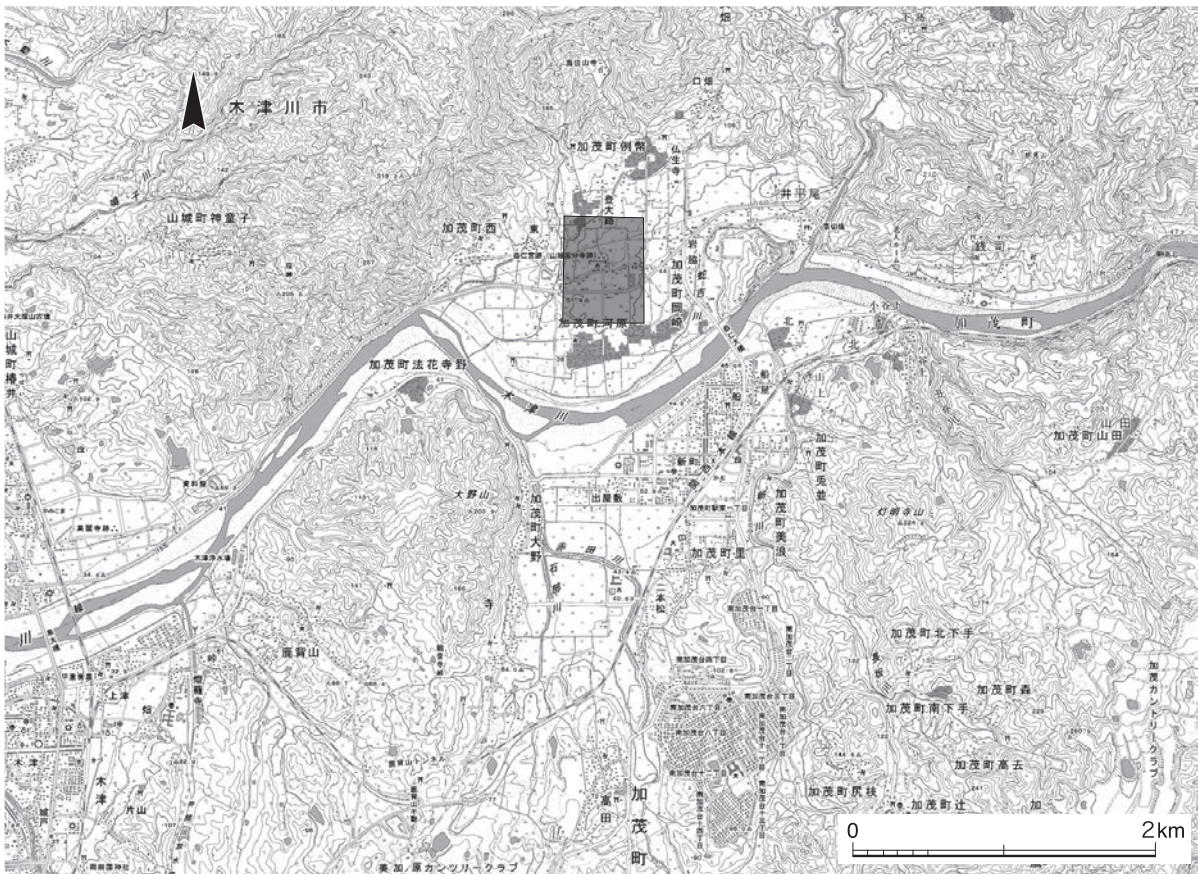
## 1. 恭仁宮とは

盾並めて 泉の川の 水脈絶えず 仕へまつらむ 大宮処(『万葉集』巻十七)

京都府と奈良県の境に近い木津川市加茂町の<sup>みかのほら</sup>瓶原地域には、現在でも美しい田園風景が広がっています。万葉集にはこの地の景勝を詠んだ歌が残されています。

天平12(740)年からの6年間、聖武天皇は宮を転々とします。天平12(740)年12月、聖武天皇によって恭仁宮造営が開始され、平城京から都が遷されました。役人に平城宮から恭仁宮に引っ越すように命じ、大極殿や回廊などの大きな建物も恭仁宮に移築されました。

恭仁宮では「<sup>こんでんえいねんしざいほう</sup>墾田永年私財法」や「国分寺建立の詔」など、現在でも多くの方が一度は聞いたことがあるような法令が定められるなど、歴史上の重要な舞台となりました。



第1図 恭仁宮の位置(1/4,000)

## 2. 恭仁宮の発掘調査

### (1) 恭仁宮の発掘調査

昭和48年度から続く発掘調査によって、恭仁宮や山城国分寺の姿が次第にわかりつつあります。恭仁宮の範囲は東西約560 m、南北約750 mの規模で、「大垣」と呼ばれる大規模な築地塀に囲まれていました。発掘調査が始まるまでは、1 km四方と考えられていたので、想定よりもずいぶんコンパクトな宮であったことが判明しました。

宮の内部の施設については、今年度の調査で朝堂院北東隅が確定したことにより、第2図のように明らかになりました。

<sup>だいり</sup>**内裏地区** 天皇が住まいし、儀式などが行われた場所を内裏といいます。恭仁宮では、東西約100m、南北約125mの規模の「内裏西地区」、東西約110m、南北約140mの「内裏東地区」の2つの区画があったことがわかっています。内裏がふたつ並び立つ様相は他の宮都では認められない恭仁宮の特徴といえます。

<sup>だいくでんいん</sup>**大極殿院地区** 大極殿院とは、宮の中心的な建物である大極殿を取り囲む空間です。恭仁宮の大極殿と大極殿院の回廊は、平城宮から移築したということが『続日本紀』に書かれています。平成18・19年度の調査で、大極殿院の回廊の北西隅が一部が見つかっていましたが、それ以外の地点では大極殿院回廊の痕跡は見つかりませんでした。令和3年度の調査では、大極殿院回廊の北東隅および南東隅が想定される地点で調査を行いました。後で述べるように、今年度の調査では、大極殿院回廊の規模を知る手掛かりとなる遺構を検出しました。都が平城京に戻った後、恭仁宮の大極殿は山城国分寺の施設(金堂)として利用されました。

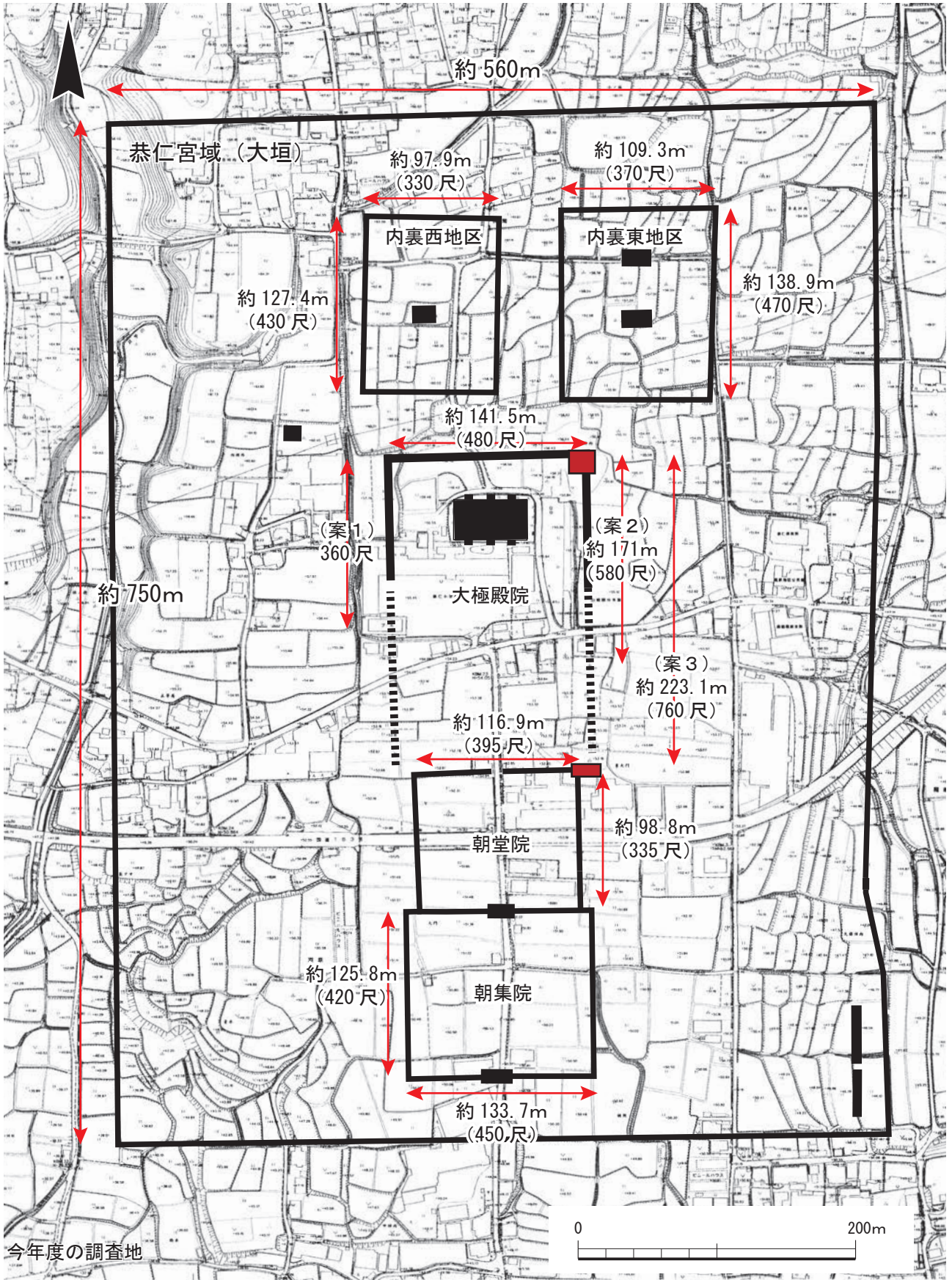
<sup>ちやうどういん</sup> <sup>ちやうしゅういん</sup>**朝堂院・朝集院地区** 大極殿院の南側には、朝堂院そして朝集院という区画が並びます。朝堂院は高官が執務や儀式を行う当時の政治の中心となる場所です。今年度の発掘調査で、朝堂院の北東隅が見つかり、朝堂院は東西約117m、南北99mの規模であることが判明しました。

朝集院は、官人が儀式の際に服装を整え、待機するところです。平成28年度の調査で四至が見つかり、東西約134m、南北約126 mであることが確定しました。



写真1 現在も残る塔の基壇





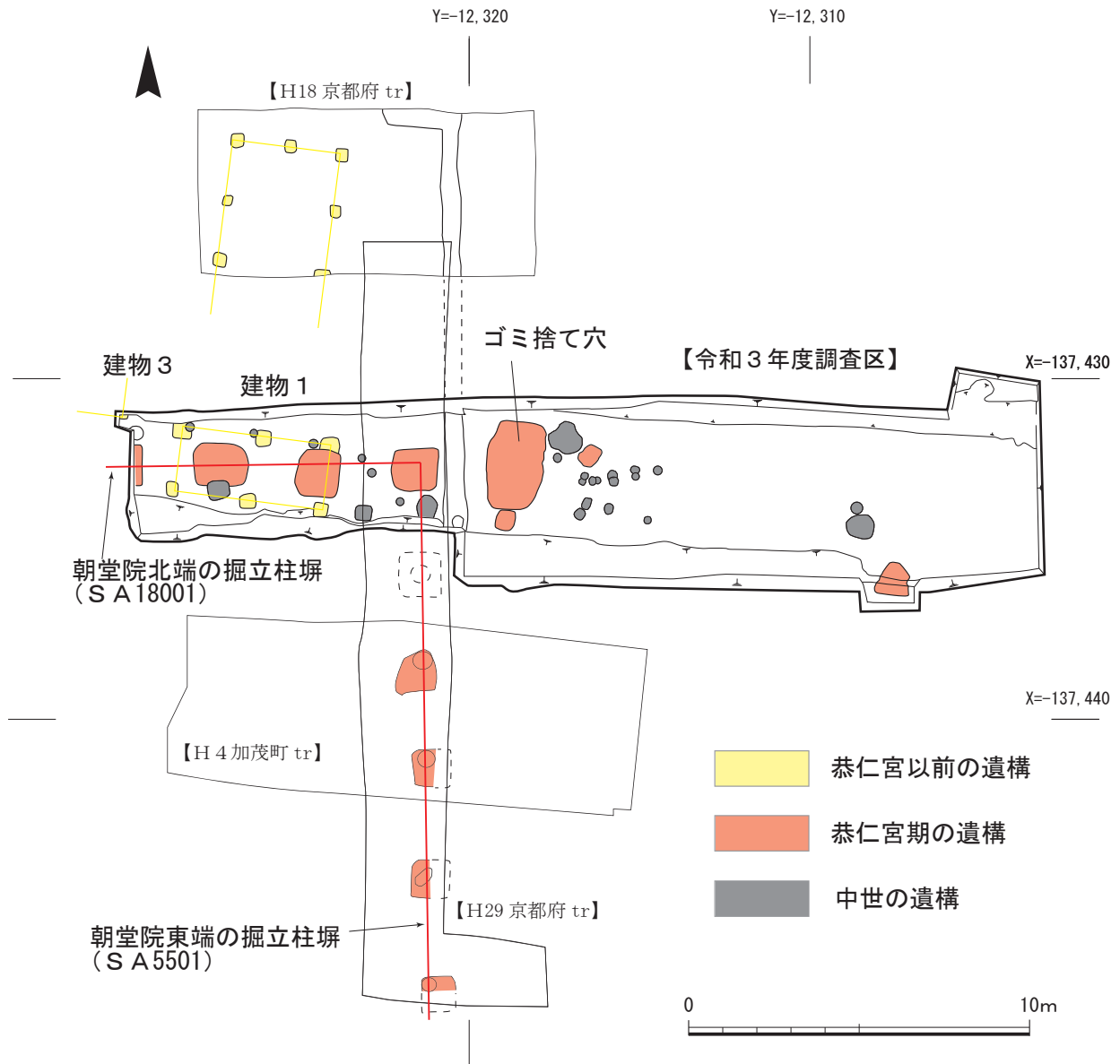
第2図 恭仁宮の主要区画の規模

## (2) 令和3年度の発掘調査

次に今年度実施した発掘調査の成果について紹介したいと思います。今年度は、大極殿院回廊の南東隅と(南調査区)、北東隅(北調査区)の2箇所が発掘調査を実施しました。

**南調査区** 大極殿院回廊の南東の隅が想定されている位置に設定した調査区です。大極殿院回廊と、朝堂院の掘立柱塀がどのように接続していたのか調べるのが目的です。

朝堂院の掘立柱塀は、今回の調査区で西に曲がるのが明らかとなり、朝堂院の規模が確定しました(第3図 S A 18001、S A 5501)。一方、大極殿院回廊の痕跡は見つかりませんでした。大極殿院回廊は地表面に痕跡が残りにくい築地回廊という構造であったことが分かっています。朝堂院を囲む掘立柱塀が1周することが明らかとなったため、恭仁宮では掘立柱塀に築地回廊が取り付く特殊な構造であった可能性が高まりました。



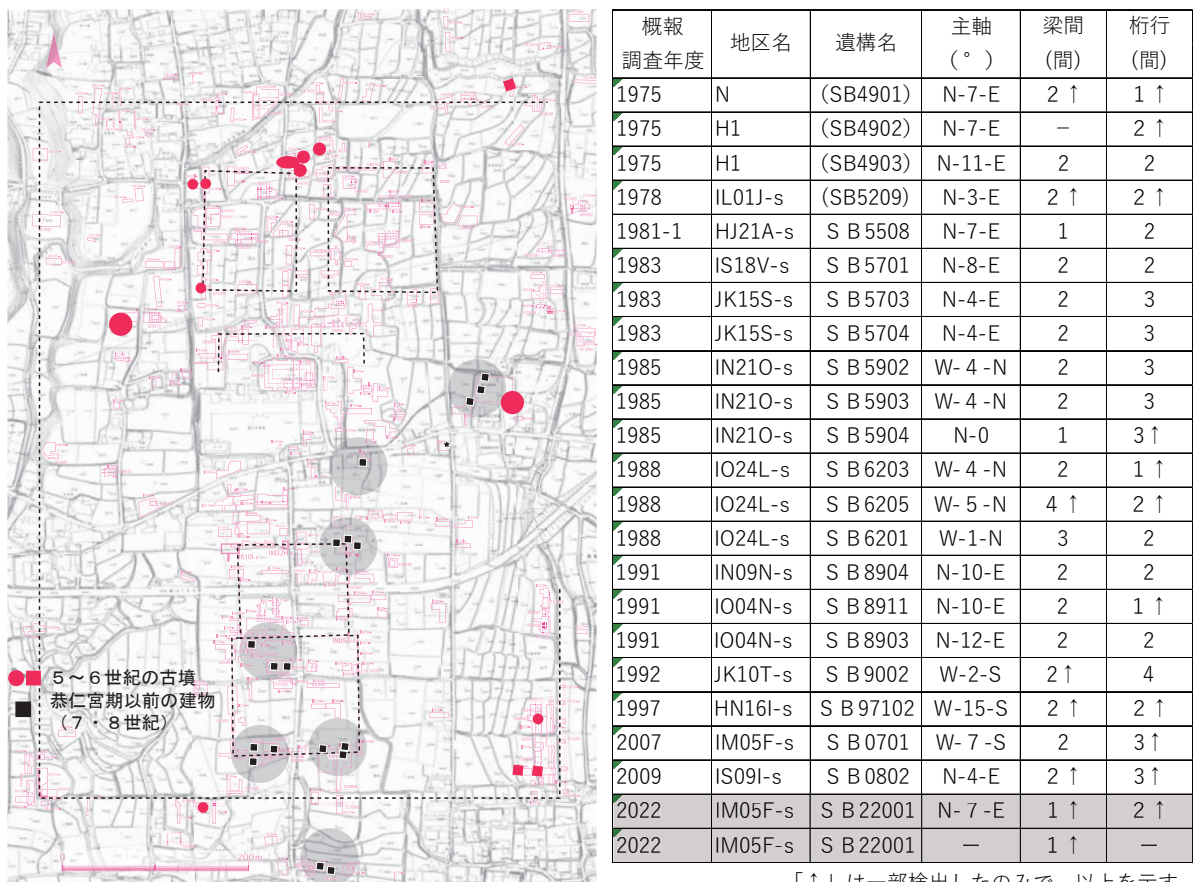
第3図 令和3年度 南調査区とその周辺で見つかった遺構(1/200)



区画の外側では、4.9m×3.8mの浅い掘り込みが見つかり、中から奈良時代の須恵器の壺や、土師器の鍋などが見つかりました。恭仁宮を造る際、あるいは解体する時に使用した土器を捨てた廃棄土坑(ゴミ捨て穴)と考えられます。

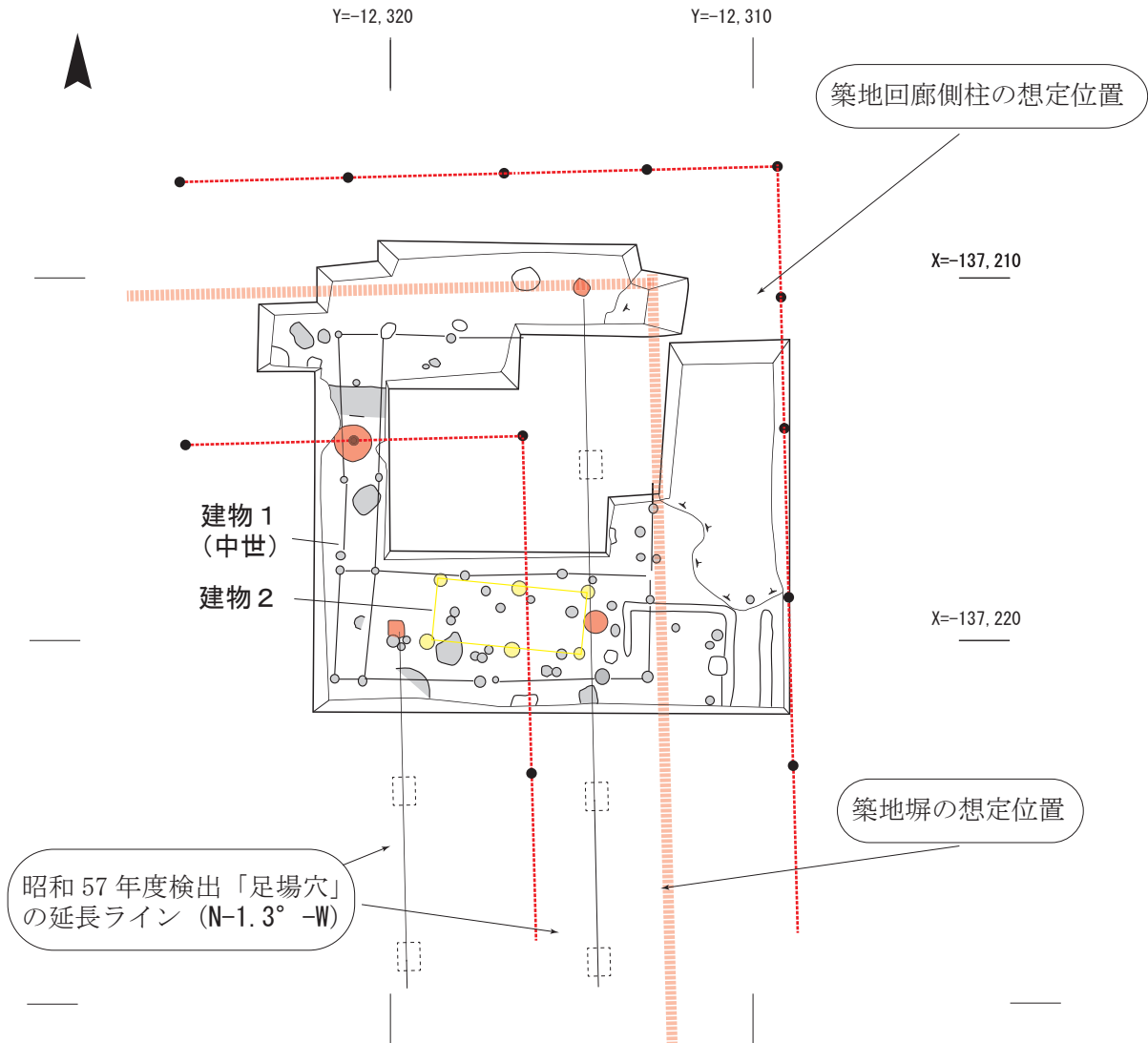
また、恭仁宮が造られる前の建物も2棟見つかりました。第3図の黄色で塗った遺構が恭仁宮よりも前の建物ですが、柱掘方の大きさは恭仁宮のものと比較すると、三分の一程度であることが分かります。ずいぶん小さく思われるかもしれませんが、当時の建物の規模としては標準的な大きさです。付近で7世紀後半の須恵器が出土していることから、この建物も同じ時期のものと考えられます。今回の調査地のすぐ北側で2007年に調査を行った際にも同じ規模、主軸の建物が見つかり、付近に恭仁宮以前の集落があったことが分かる貴重な成果です。

実は、恭仁宮の調査では、これまでも恭仁宮以前の人びとの生活の痕跡があちこちで見つかり、7～8世紀前半の建物は今回の2棟を合わせ23棟になりました。いずれも、恭仁宮の建物とは異なり、小規模で主軸も北を向いていないものが多く、周囲の地形に合わせて建てられていました。これらの建物は、散発的に見つかるというわけではなく、数棟程度がまとまって見つかる傾向にあります。恭仁宮が造られた段丘上には、このような



「↑」は一部検出したのみで、以上を示す。

第4図 恭仁宮が造られる前の集落と古墳(表は7・8世紀の建物)



第5図 令和3年度 北調査区とその周辺で見つかった遺構(1/200)

小規模な集落がいくつか存在したと考えられます。文献史料によると、恭仁宮ができる以前にはこのあたりは「相楽郡恭仁郷」という郷が存在したとされており、その一端を確認したといえるでしょう。

**北調査区** 北調査区は、大極殿院回廊の北東の隅が想定されている位置に設定した調査区です。

結論から述べると、今回の調査で回廊と確定できる遺構は検出できませんでした。しかし、回廊の手掛かりとなる遺構を見つけることができました。

調査区の3箇所では、大極殿院回廊を造った際の工事の痕跡とみられる「足場穴」が見つかりました。同じような痕跡は昭和57年度の調査でも見つかっており、今回の調査区は北側の延長部に当たります。見つかったのは1辺60cm程度の小さな穴の痕跡ですが、この穴の痕跡は約4.6mの間隔で南北約80m続いていることが分かりました。



なお、調査中に見つかった珍しい遺物として、凝灰岩を加工した「切石凝灰岩」があります(写真3)。凝灰岩は柔らかく加工しやすい石で、平城宮でも基壇の外装として使用されたことが分かっています(奈良文化財研究所2010)。

以上のように、大極殿院回廊の本体に伴う遺構は後世の地形の改変によって痕跡をほとんどとどめていませんが、この付近に大極殿院回廊が存在した可能性が高まりました。

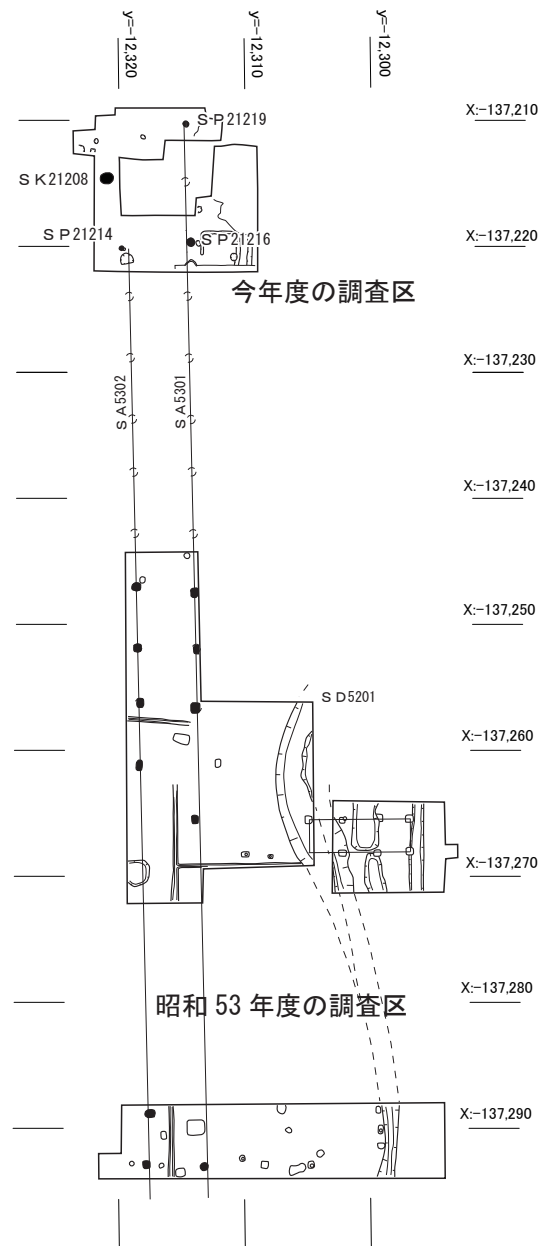
このほかの成果として、中世(15世紀後半)の掘立柱建物も見つかりました。都が恭仁宮から平城宮に戻ったのち、この地は山城国分寺として整備されました。今回見つかった建物は、山城国分寺が衰退した鎌倉時代よりも後のもので、山城国分寺がなくなった後もこの場所で人びとが生活していたことがわかる貴重な事例となりました。



写真2 北調査区で見つかった遺構



写真3 北調査区で出土した切石凝灰岩



第6図 過去の調査で見つかった足場穴遺構(1/500)

### 3 まとめ

今回の調査では、朝堂院の北東隅が見つかり、朝堂院が掘立柱塀で四周を囲まれていたことが確定しました。また、大極殿院の回廊については、明確な遺構は見つけることができませんでしたが、構造の解明につながる手掛かりを得ることができました。

これらの成果を受け、恭仁宮の主要区画の規模がほぼ確定しました。第6図には、平安京以前の宮城の主要区画を示しています。恭仁宮は他の宮城と比べ、実態がよくわかっていませんでしたが、およそ50年間の発掘調査の積み上げを経て、ようやく他の宮城と比較検討する素地が整ったといえるでしょう。今後、これまでの成果をまとめ、恭仁宮についての研究が進めていくことが必要です。

#### 【参考文献】

奈良文化財研究所2010『図説平城京事典』

奈良康正2010「恭仁宮大極殿院考」『京都府埋蔵文化財論集』第6集、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

京都府教育委員会2000『恭仁宮跡発掘調査報告』Ⅱ

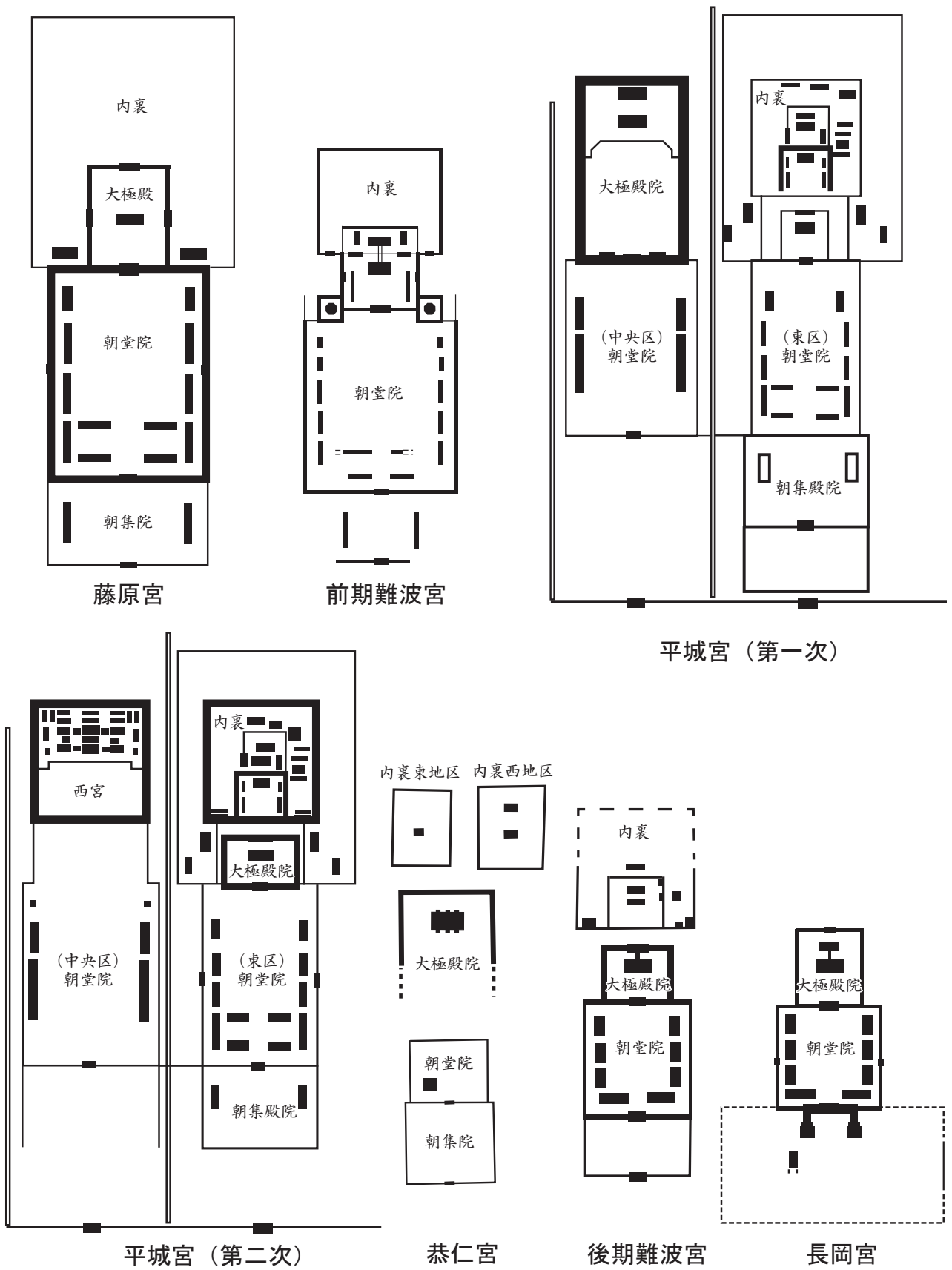
京都府教育委員会1976～『埋蔵文化財発掘調査概報』

京都府教育委員会2005～『京都府埋蔵文化財調査報告書』



写真4 足場穴の検出状況(人が立っている部分が足場穴)

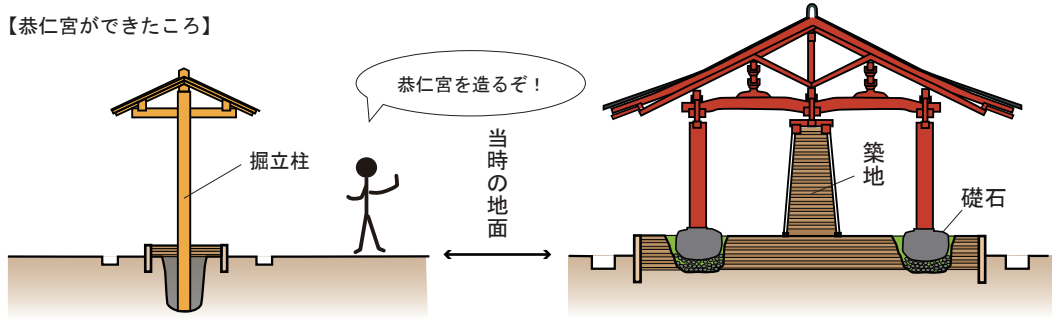




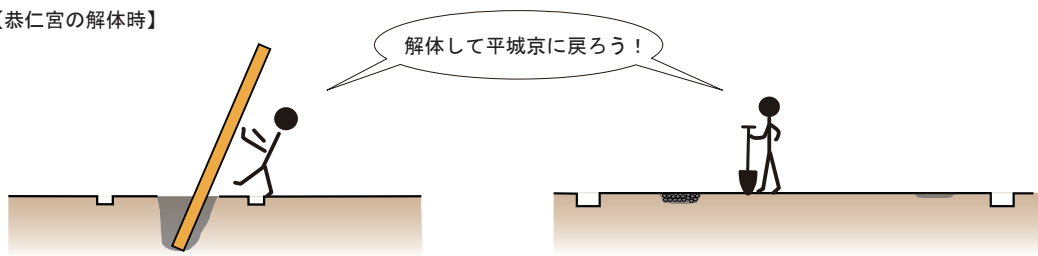
第6図 長岡京以前の宮の主要区画の比較

## ○コラム 築地回廊と掘立柱塼

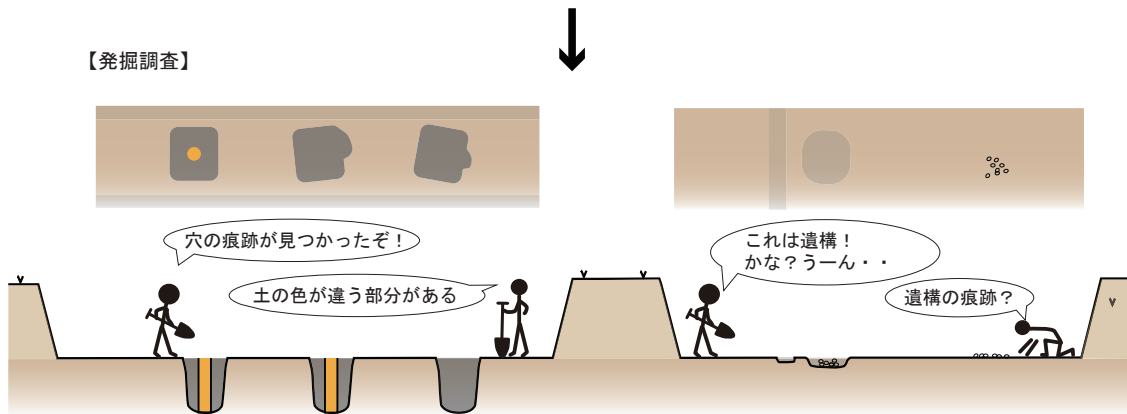
【恭仁宮ができたころ】



【恭仁宮の解体時】



【発掘調査】



**築地回廊**は、中央が土を塗り固めた塼（築地塼）で、その両側が通路となります。屋根には瓦が葺かれるなど多くの資材と複雑な工程が必要な、宮殿建築で最高の格式の区画施設です。恭仁宮では、**大極殿院回廊**に用いられた型式です。

築地回廊は地面に直接痕跡が残りにくいため、発掘調査で見つかることは稀です。恭仁宮では、平成18・19年度に大極殿院回廊の北西隅が見つかっていますが、それ以外の地点では確定的な遺構は見つかっておらず、大極殿院の南北の規模については複数の案が並立しています。

**掘立柱塼**は、地面を堀くぼめ、柱を1本ずつ等間隔に立てた、板葺き屋根の簡素な区画施設です。恭仁宮では**朝集院**や**朝堂院**、**内裏地区**の一部で採用されています。



# 長岡京の大路に面した宅地の調査

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター  
松井 忍

## 1. はじめに

長岡京は、延暦3(784)年、桓武天皇によって平城京から遷され、10年間営まれた都です。長岡京の京域は、向日市・長岡京市・大山崎町と京都市の一部に及ぶ東西約4.3km・南北約5.3kmの範囲と考えられています。

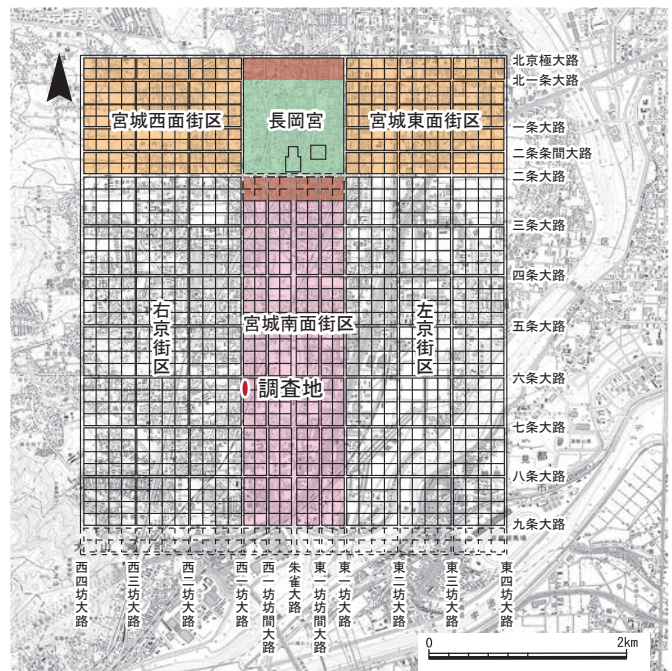
長岡京では、北辺に宮城を置き、二条大路以北に宮城東面街区と宮城西面街区、そして東一坊大路と西一坊大路間に宮城南面街区があったと考えられています(第1図)。三街区には、離宮や官衙町・高級貴族の邸宅があり、左右の京街区には、宅地と東西の市が置かれ、官人や兵士、商工業に携わる人々が居住していたと考えられています。

長岡京の発掘調査は、昭和29(1954)年からはじまり、これまで宮域で538次、右京域で1259次、左京域で660次(令和4年2月現在)の調査が行われており、調査の合計数は2457回にもなります。

今回は、六条大路と西一坊大路の交差点の南東部付近で令和元年度以降に行った発掘調査と、調査地周辺のこれまでの発掘調査の成果をもとに、調査地周辺の土地利用について、考えてみたいと思います。

## 2. 発掘調査の成果

今回の報告では、令和元年度の右京第1201次と令和2年度の右京第1233次調査および今年度の右京第1241次調査をとりあげます。調査地は、西一坊大路と右京七条一坊十五・十六町に含まれます(第1図)。



第1図 調査地位置図



写真1 右京第1241次調査1・2区で見つかった遺構群(北から)

調査では、掘立柱建物・柱列・土坑のほか、西一坊大路の東側溝とその内側の区画溝などが見つかりました。

**溝1 (西一坊大路東側溝)** 右京第1241次調査1・2区で約31mにわたって見つかった西一坊大路の側溝で、幅1.4m、深さ0.35mを測ります。溝の底に近い箇所からは長岡京期の土器に加え、土馬や瓦なども見つかっています。

**溝2 (大路内側区画溝)** 右京第1241次調査1・2区で見つかった幅0.6m、深さ約0.2mの溝です。溝1 (西一坊大路東側溝)からは約3.5m東側に掘られており、大路と宅地を区画する築地に伴う雨落ち溝と考えられます。

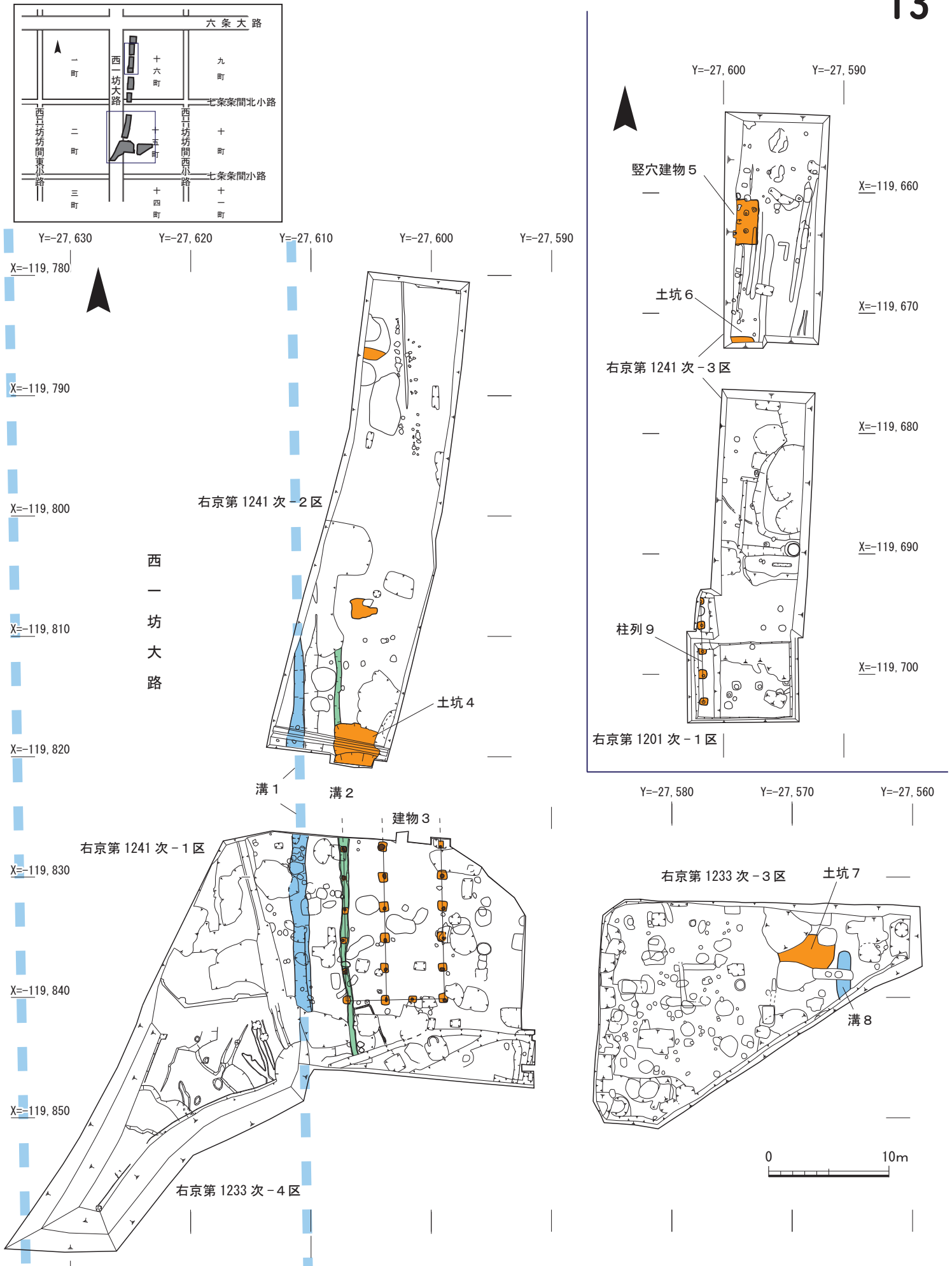
**建物3** 右京第1241次調査1区で見つかった、梁行2間(4.5m)・桁行5間(12.7m)以上の南北棟の掘立柱建物で、西側に<sup>ひさし</sup>廂が付きます。柱の掘形は0.7~0.9m、柱の太さは0.25~0.3mで、柱間寸法は平均は東西2.45m(8.2尺)、南北2.55m(8.5尺)でした。

廂部分の柱痕跡が溝2の上面では確認できなかったことと廂部の柱筋が大路側溝に近接



写真2 溝1遺物出土状況(北から)





第 2 図 検出遺構平面図 (S = 1/400)



写真3 土坑4 遺物出土状況



写真4 土坑4 出土墨書土器  
(側面に「大」、底に「十」が見える)

していることから、まず廂付きの建物が建てられたのち、大路の整備に伴い築地塀が造られる際に、廂部分が解体され、築地の雨落ち溝として溝2が掘られたことが考えられます。

**土坑4** 右京第1241次調査2区で見つかった、東西3.2m以上、南北3.2m以上、深さ0.6mを測る土坑です。溝2の埋没後にまず北側を掘り、南側を掘り直していることがわかりました。土坑内からは使用痕の残る円面硯や、「大」「大」「十」と記された墨書土器をはじめ、たくさんの土器がみつかりました。おそらく周辺の建物などで使用され、不要になったものを廃棄した土坑でしょう。建物3で使用したものも含まれているのかもしれませんが。

**竪穴建物5** 右京第1241次調査3区で見つかった南北3.7m、東西2m以上、深さ0.2mの長岡京期の竪穴建物です。西半分は調査区外となっているため全容はわかりませんが、周辺の柱穴に比べてやや深く掘られた主柱穴を2か所で確認しています。

乙訓地域では、一般の住居は飛鳥時代頃に竪穴住居(建物)から掘立柱建物へ移行します。長岡京内で検出された長岡京期の竪穴建物の多くは出土遺物などから工房に関わるものと考えられています。

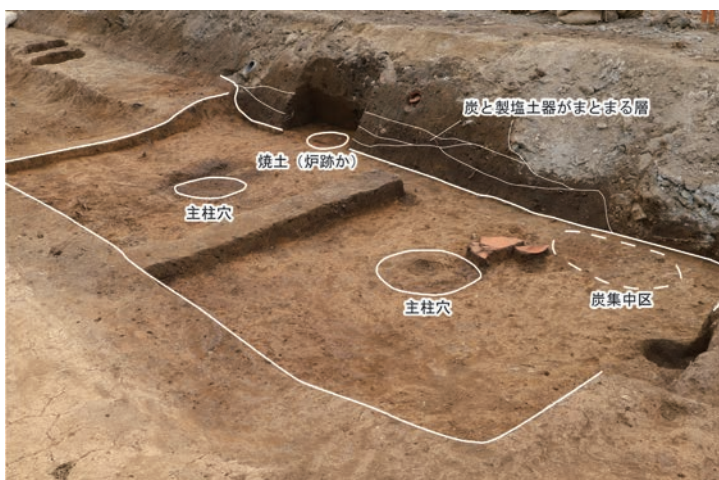


写真5 竪穴建物5 (北東から)

今回の調査では、鉄製品や鑄造に関連する遺物は見つかっていませんが、壁際で炉のようなものと、炭片や土器がまとまっていた箇所がありました。土器の中には製塩土器が多く含まれていたことが特徴的です。竪穴建物の南側の土坑6から出土した製塩土器などは、この建物で利用されたものが廃棄されたとも考えられます。



後述する土坑7からも製塩土器が出土しており、また調査地北側の4町域(右京第630・654次調査)では8,400点を超える製塩土器が見つかったこともあり、この竪穴建物は製塩土器を必要とする工房として営まれたものかもしれません。

**土坑6** 右京第1241次調査3区で見つかった東西1.8m、南北0.8m以上、深さ0.14mを測る土坑です。南側のほとんどが調査区外となっているため、全容を知ることができませんが、埋土から、少量の須恵器などとともに、たくさんの製塩土器が見つかりました。土坑の上部が近世以降の整地等によって大きく削られて残りが良くなかったことを考えると、元はさらにまとまった量の製塩土器が捨てられていたのかもしれない。



写真5 土坑6 遺物出土状況(北から)

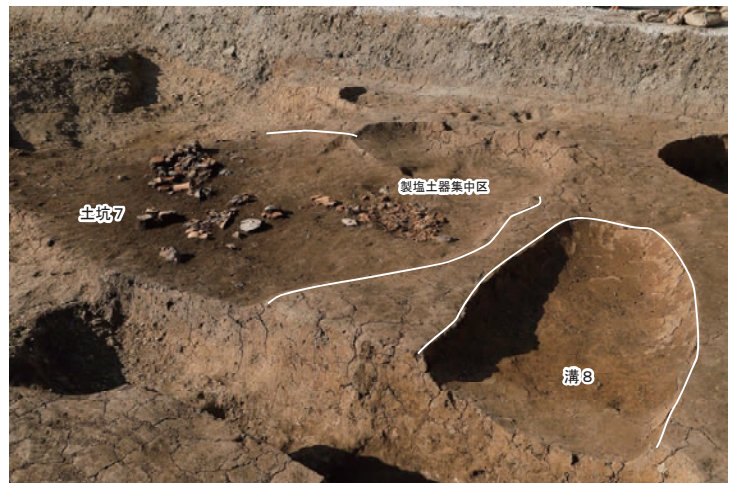


写真6 土坑7・溝8 遺構検出状況(南東から)

**土坑7** 右京第1233次調査3区で見つかった不定形の土坑です。近世以降の土坑などに削られており、全容はわかりませんが、おおよそ東西4.5m、南北2.6m以上のものと思われます。底面には凹凸があり、深さ0.2~0.3mの中で何度か掘り直しながら不要となったものを捨てた土坑と考えられます。中からは長岡京期の土器類がまとまって見つかりました。土坑の東側では、製塩土器が集中して出土しています。

**溝8** 右京第1233次調査3区で見つかった溝状遺構です。北側の途中で途切れており、南側は調査区外となっています。土器はあまり多くなかったことから、溝状の廃棄土坑などではなく、町内を区画する溝の一部と考えられます。

**柱列9** 右京第1201次調査の1区で見つかった2間分の柱列が、右京第1241次調査(3区)でさらに北へ2間続くことがわかりました。これで柱列は4間分(8.4m)となりました。柱の掘形は約0.55~0.7m、柱の太さは約0.2mで、柱間は約7尺でした。残念ながら、東側は近世の時期に大きく削られており、南北棟の掘立柱建物になるのか、あるいは柵列のようなものになるのかはわかりません。

### 3. 調査地と西市（第4図）

平城京では、西市は右京八条二坊、東市は左京八条三坊で、ともに五・六・十一・十二坪の四町を占めていたと考えられており、長岡京では、東西の一坊大路を挟んで西に西市、東に東市があったと考えられています。

東西市の大きさは、平城京や平安京の市の大きさから、四町と推定され、下記の調査成果から西市は、今回の調査地の西側、右京七条二坊一・二・七・八町から六条大路を挟んで北側の一带にあったと推定されています。西市の推定地から

第3図 市のにぎわい(江口準次作画)  
 (『復元日本大観3 都城と国府』より)

は以下のような遺構や遺物が出土しています(詳細は第4図下)。

- ・木簡「自司進」と「西」の墨書土器(右京第102次)・・・司は「市の司」か。「西」は西市か。
- ・題箋木簡「金銀帳か」(右京第410次)・・・金銀の出納帳に付けられていたもの
- ・墨書土器「西」「市」「長」(右京第102・565・688次)・・・「長」は価格を検査する「<sup>かちよう</sup>価長」か
- ・石組みの護岸遺構と「<sup>くれ</sup>樽」「久米郷白米」などの木簡(右京第713次)
  - ・・・石組みはほとんどが宮内の施設、木簡は商品の集荷に伴うものか
- ・幅広で深い小路側溝(右京第1117・1159次)・・・市への運河的役割か

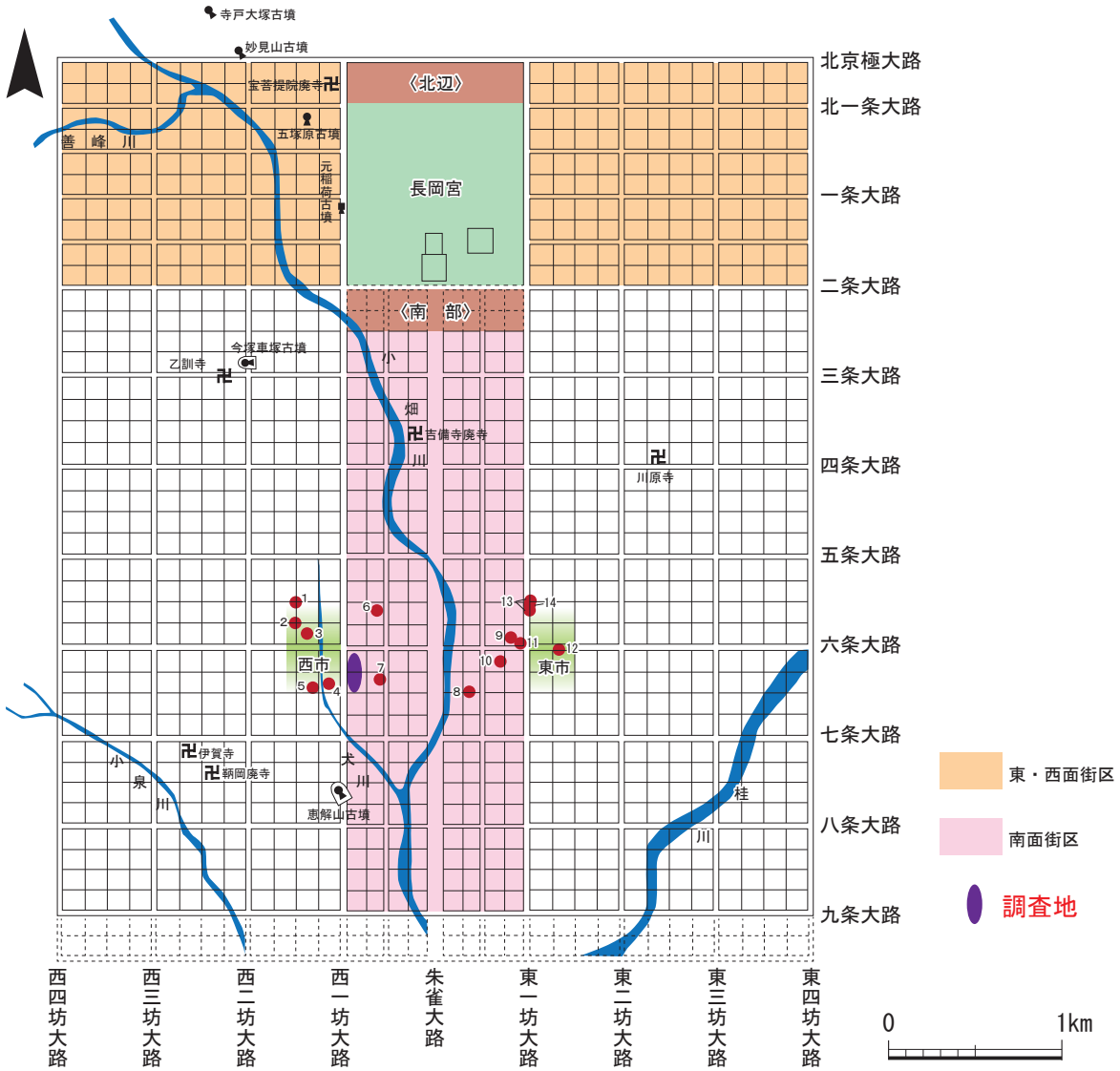
### 4. おわりに

今回の調査では、右京七条一坊十五・十六町のごく一部ではありますが、その土地利用を垣間見ることができました。調査地は、京内でも宮城南面街区という特別な地区であることから、2間×5間以上の廂を持つ建物3は、その規模や近接する土坑から円面硯などが出土したことから公的機関の一部である可能性があり、製塩土器がまとまって出土した竪穴建物5も単なる住居空間などではなく、何らかの工房であったと考えられます。

また、調査地の西側でのいくつかの調査では、「西市」を想起させる遺構・遺物が検出されており、隣接する今回調査を行なった宅地内にも「西市」に関わる重要な施設があったことが想定されます。

今後、周辺の調査が進むことによって、長岡京の西市周辺の様子がさらに明らかになっていくことに期待します。





- 1 (右京第1117・1159次) 南北方向の堀状道路側溝(西市への水運考慮か)
- 2 (右京第565次) 交差点で橋状遺構・条坊側溝から「古文孝経」木簡・「長」墨書土器・製銅工房と思われる未製品  
(右京第688次) 護岸された条間北側溝から荷札木簡・呪符木簡・「市」墨書土器・人形祭祀具など多様な製品を扱う工房か(取鍋・鞆羽口・漆附着土器・鉈尾未製品など)
- 3 (右京第410次) 板材と杭で護岸された南北溝から「金銀帳」題箋軸・荷札木簡・木沓・人形祭祀具石鏝(丸鞆)未製品
- 4 (右京第102次) 東西溝から「自司進」木簡・「西」墨書土器・わらじ・布など
- 5 (右京第713次) 石組み護岸溝から荷札木簡・糸巻きなどを含む多くの木製品・人形祭祀具
- 6 (右京第630・654・782次) 四町利用宅地内の製鉄工房(製鉄関連遺物を含む遺構)・多量の製塩土器
- 7 (右京第548次) 竪穴状遺構から坩堝・炭・焼土(製鉄工房か)
- 8 (左京第245次) 迷子告知札木簡・人形祭祀具・坩堝・鞆羽口(工房か)
- 9 (左京第541次) 「厨」墨書土器(厨房を伴う施設か)
- 10 (左京第204次) 漆器大型合子・銭貨60枚・檜扇
- 11 (左京第557次) 交差点南側で橋状遺構、銭貨・漆皮箱・漆紗冠・漆附着土器など(漆工房か)
- 12 (左京第302次) 条坊側溝から漆漉し・漆附着土器(漆工房か)
- 13 (左京第311・316次) 東一坊大路側溝に板材と杭の護岸施設、銭貨19枚・石製丸鞆

第4図 長岡京の東西市とその周辺の関連調査成果

## 《参考文献》

國下多美樹 2018「都の市とその周辺」『龍谷大学日本古代史論集』

館野和己 2001『リブレット7 古代都市平城の世界』山川出版社

池田裕英 2017「平城京東市の造営と東堀河の掘削」『都城制研究（11）日本古代の都城を造る』奈良女子大学古代学学術研究センター

岡田茂弘編 1988『復元日本大観3 都城と国府』世界文化社

（財）長岡京市埋蔵文化財センター 1984「長岡京跡右京第 102 次調査概要」『長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第 1 集』

（財）長岡京市教育委員会 1993「長岡京跡右京第 410 次調査調査概要」『長岡京市文化財調査報告書 第 31 冊』

（財）長岡京市埋蔵文化財センター 1997『長岡京跡右京第 548 次調査概要』

（財）長岡京市埋蔵文化財センター 1999「右京第 565 次調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成 9 年』

（財）長岡京市埋蔵文化財センター 2002『長岡京市文化財調査報告書 第 26 集』

（財）長岡京市埋蔵文化財センター 2002「右京第 688 次調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成 12 年度』

（財）長岡京市埋蔵文化財センター 2003「右京第 713 次調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成 13 年度』

（財）長岡京市埋蔵文化財センター 2004「右京第 782 次調査概要」『長岡京市文化財調査報告書 第 39 集』

（公財）長岡京市埋蔵文化財センター 2017「右京第 1117 次調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成 27 年度』

（公財）長岡京市埋蔵文化財センター 2019「右京第 1159 次調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成 29 年度』

長岡京市埋蔵文化財センター 1992「左京第 245 次調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成 2 年度』

（公財）長岡京市埋蔵文化財センター 2015「長岡京跡左京第 302 次調査～長岡京期、条坊側溝等出土資料～」『長岡京市埋蔵文化財発掘調査資料選（五）』

長岡京市埋蔵文化財センター 2012「左京第 541 次調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成 22 年度』

（公財）長岡京市埋蔵文化財センター 2014「左京第 557 次調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成 24 年度』

（公財）長岡京市埋蔵文化財センター 2016「長岡京跡左京第 311 次調査～長岡京期、東一坊大路側溝出土資料～」『長岡京市埋蔵文化財発掘調査資料選（六）』

（公財）長岡京市埋蔵文化財センター 2016「長岡京跡左京第 415 次調査～長岡京期、東一坊大路側溝出土資料～」『長岡京市埋蔵文化財発掘調査資料選（七）』



# 近年発見された長岡京内の大規模宅地について

公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター  
中島 皆夫

近年、長岡京市域で実施された発掘調査では、長岡京内の大規模な宅地が相次いで発見されました。宅地の規模や建物の構造、配置など、大規模宅地を頂点とする「住まい」は当時の階層社会が端的に示されています。ここでは、こうした最新の調査成果をご紹介しますとともに、発見された大規模宅地が有する性格や特徴を報告します。

## 1. はじめに

長岡京の条坊道路と宅地

宅地の基本となる一町の大きさ

宅地復原の難しさ・・・広範な調査機会の少なさ、中心建物や区画の認識

## 2. 宅地規模の例と階層性

小規模宅地の例・・・建物規模が比較的小型

井戸の種類、食器・・・

大規模宅地の例・・・中央に大型建物を配置、建物の柱間規模や庇

井戸の種類、食器・・・

例外的な区画・・・長岡宮周辺などの宮外官衙施設、東西市

## 3. 近年発見された大規模宅地

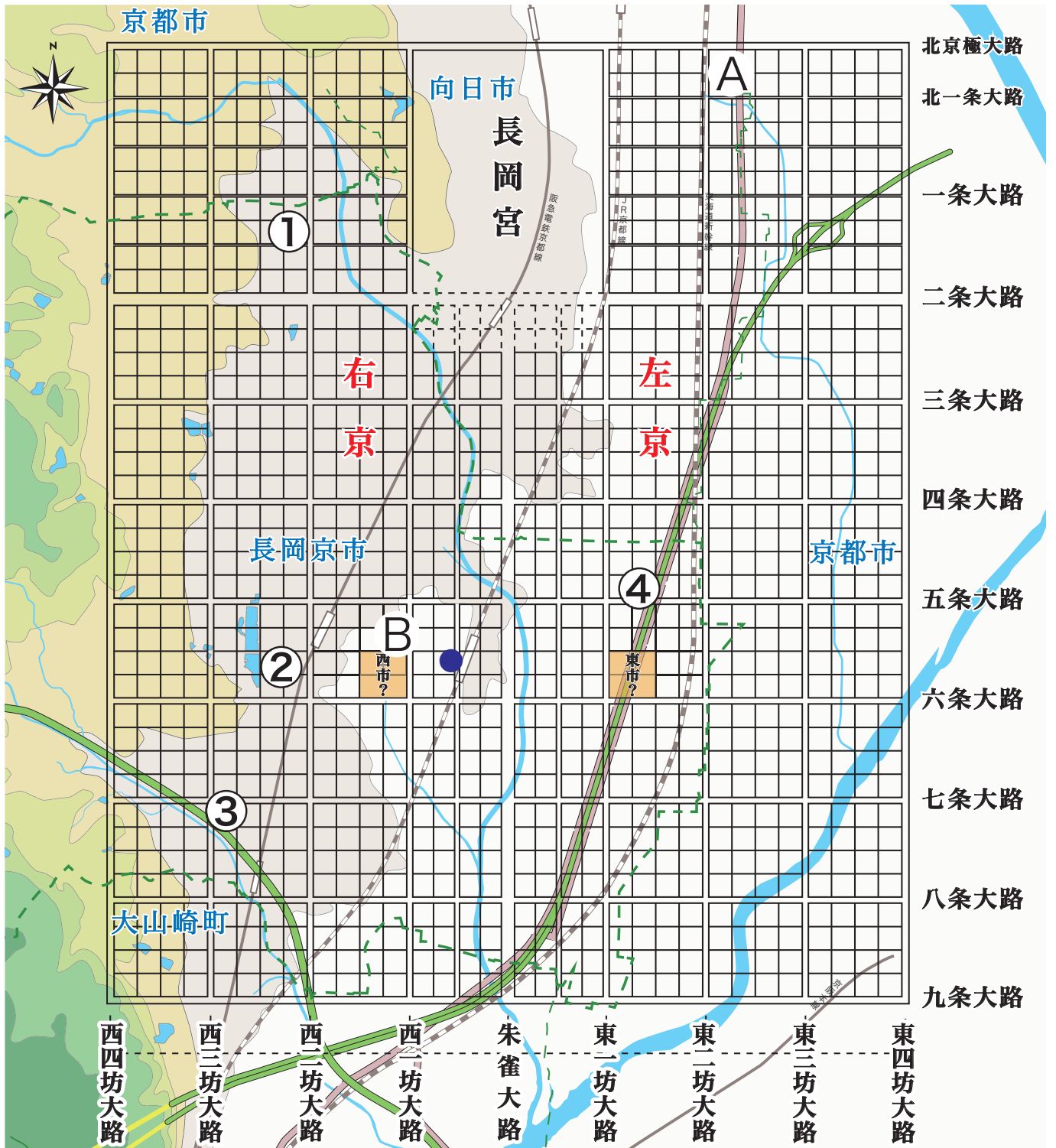
① 右京二条三坊二町(長岡京市井ノ内・右京第1158次調査)

② 右京六条三坊三・六町(長岡京市天神・右京第1177次調査)

③ 右京八条三坊十六町(長岡京市下海印寺・右京第1180次調査)

④ 左京五条二坊五町(長岡京市馬場・左京第634次調査)

## 4. まとめ



		大路			大路					
	十六町	九町	八町	一町	一町	八町	九町	十六町		
右	十五町	十町	七町	二町	朱雀大路	二町	七町	十町	十五町	左
京	十四町	十二町	六町	三町	大路	三町	六町	十二町	十四町	京
	十三町	十一町	五町	四町		四町	五町	十一町	十三町	
		大路				大路				

第1図 長岡京の条坊復原と宅地(町)の呼称



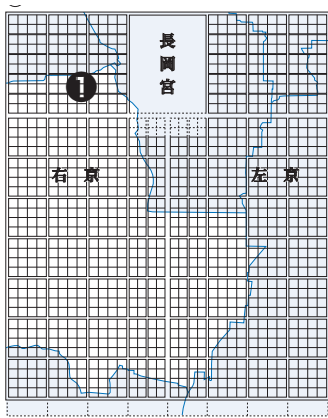
A 桓武天皇の東院(周辺の調査地と遺構配置)

B 右京六条二坊二町の宅地

### ①右京二条三坊二町(右京第1158次調査)

大規模宅地発見の契機となったのは、昭和54(1979)年に長岡京市井ノ内で行った長岡第十小学校建設に伴う右京第25次調査です。この調査では、右京二条三坊二町のほぼ中央で大型の東西棟建物(東西7間か・南北2間、南北2面庇、柱間3m)が確認されており、建物は少なくとも1町域を占有する宅地の正殿と考えられました。

右京第25次調査から40年近くを経た平成29(2017)年に行われた右京第1158次調査では、正殿のすぐ西側で南北方向に長い大型建物(南北8間以上・東西2間、東面庇、柱間3m)が発見されました。正殿との位置関係から「コ」字形配置の西脇殿に当たる建物と考えられます。



今回の成果から、発掘調査は行われていませんが、正殿の真東にも同規模の東脇殿が存在するものと考えられます。また、右京二条三坊二町と七町を画する西三坊坊間東小路の両側溝が確認されていないことから、中心区画の二町に対し、付随施設が七町に置かれたとが想定できます。

右京二条三坊二町は長岡宮の真西にあたり、小畑川で隔てられているものの、この地にも有力者の宅地が展開していたことが分かりました。

第3図 宅地の位置



第4図 右京二条三坊二町 周辺の調査地と遺構配置(図中R●●は、右京第●●次調査を示す)





第5図 右京二条三坊二町の西脇殿と正殿



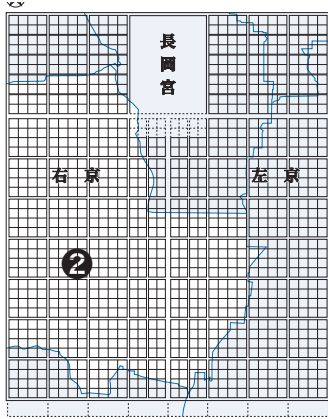
第6図 正殿(南から)



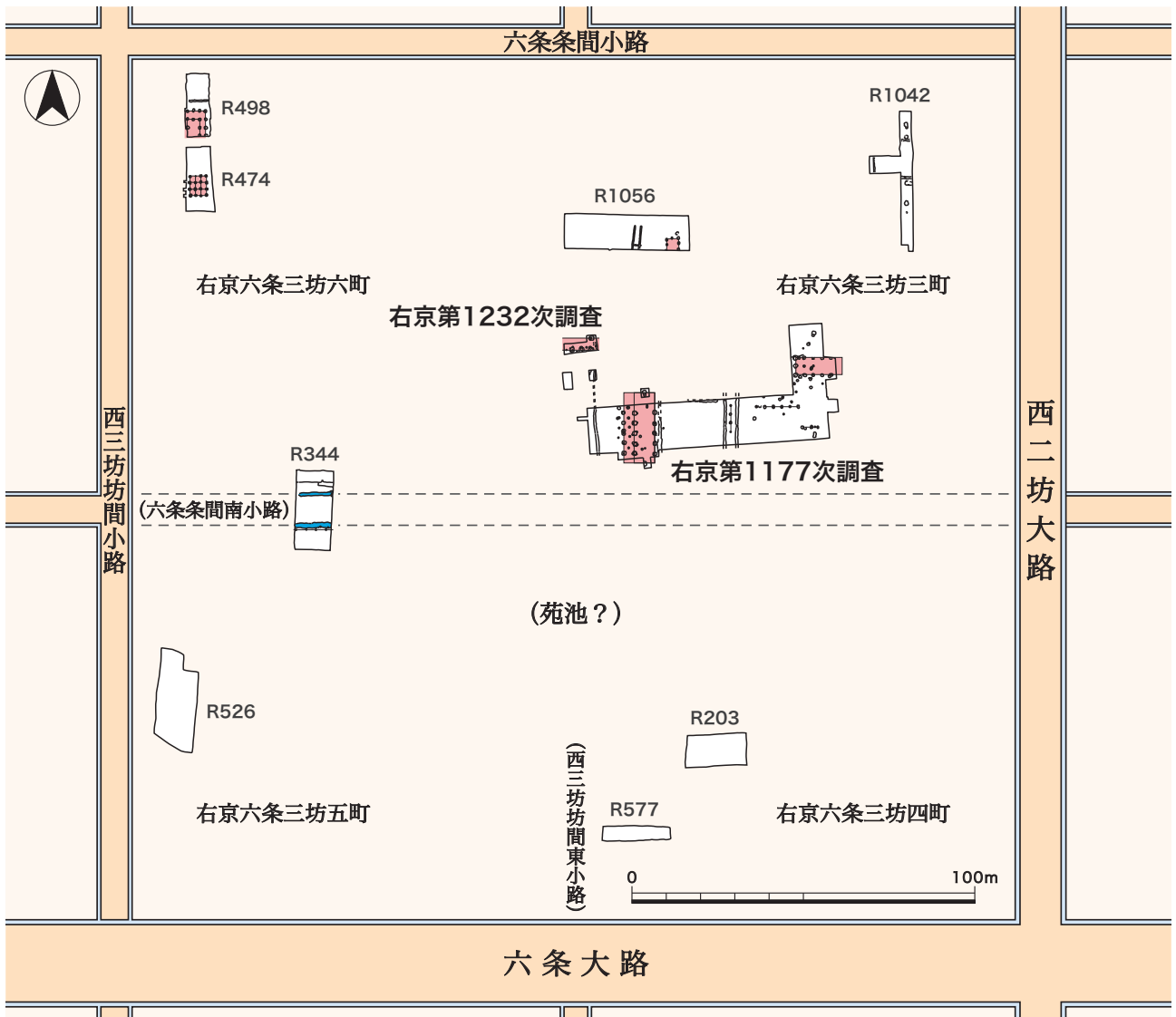
第7図 正殿の柱根(南から)

②右京六条三坊三・六町(右京第1177・1232次調査)

平成30(2018)年、長岡京市天神で行った病院建設に伴う右京第1177次調査では、大型の南北棟建物(南北7間・東西2間、西面庇、柱間3m)や南北方向の築地塀と考えられる遺構などが見つかりました。南北方向の築地塀は右京六条三坊三・六町を東西に三等分する位置に設けられており、宅地は少なくとも三・六町の2町域を占有し、三・六町の中央区画にある大型建物は「コ」字形配置の東脇殿にあたるものと考えられます。さらに、次年度に実施された右京第1232次調査では、後殿の一部と考えられる大型の柱掘形が見つっています。こうした建物群は三・六町でも南寄りの六条条間南小路近くに配されていることから、南にある小路側溝を埋め立て右京六条三坊三～六町の4町域を一体的に利用した可能性も考えられます。



第8図 宅地の位置



第9図 右京六条三坊三・六町 周辺の調査地と遺構配置



西二坊大路より西側にあたる当地に大規模宅地が存在することは想定されておらず、宅地の性格が注目されます。残念ながら木簡などは見つかりませんが、調査では文様の中央に「旨」異字体を陽刻した軒丸瓦が多数見つかりました。この瓦は「勅旨所系」「離宮系」と呼ばれ東院や寺院などで出土していることから、この場所に離宮など天皇家に関わる施設があったものとも考えられます。



第10図 上空から見た右京第1177次調査全景



第11図 東脇殿(南西から)



「旨」軒丸瓦

東脇殿柱掘形の礎板

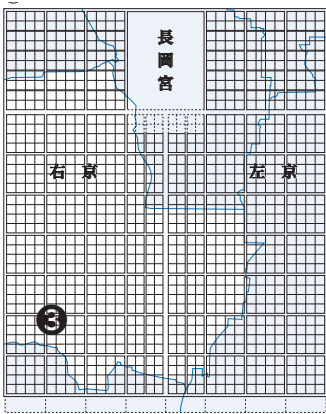
柵柱掘形の礎

第12図 出土遺物



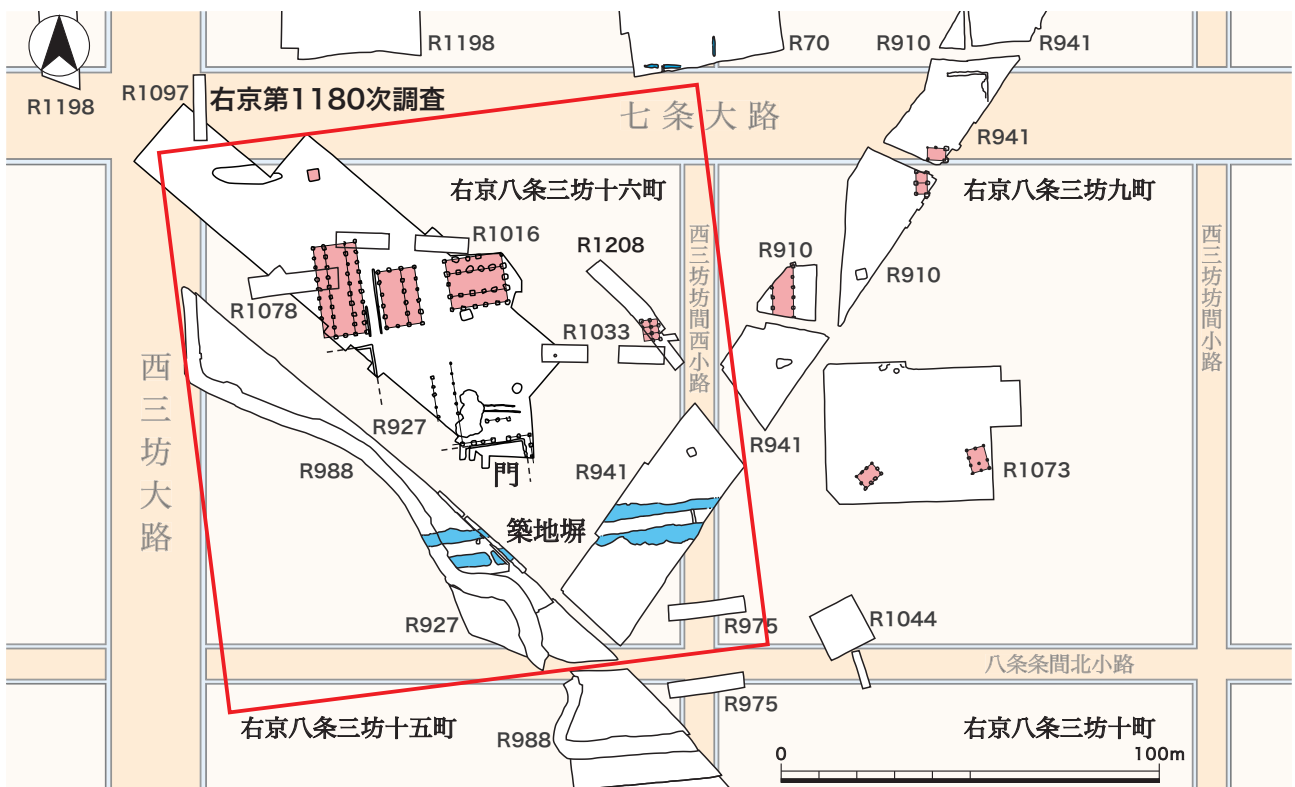
### ③右京八条三坊十六町(右京第1180次調査)

長岡宮から最も離れた場所で発見された大規模宅地は、平成30・31(2018・19)年に長岡京市下海印寺の病院建設に伴う右京第1180次調査で確認されました。この調査では、大型の建物3棟、塀や門、井戸など多数の遺構が確認されています。正殿と考えられるのは大型の東西棟建物(東西5間・南北2間、南北2面庇、柱間3m)で、その西側に大型の南北棟建物2棟(南北5間・東西2間、東面庇、柱間3mと南北9間・東西2間、東西2面庇、柱間2.7m)が配されています。南北棟建物のうち正殿に近いものは西脇殿、より西側で南北に長いものは甕据え付け穴を持つことから醸造用の建物と考えられます。

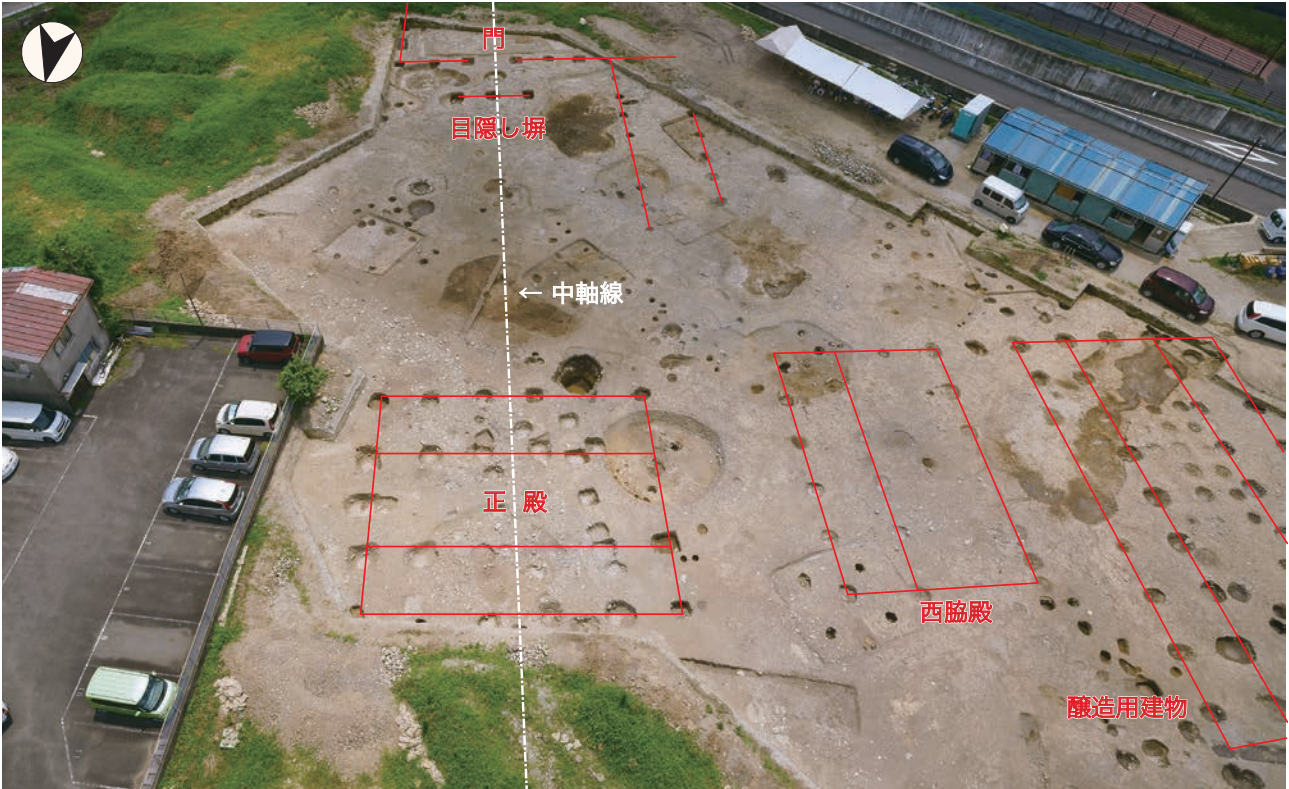


第13図 宅地の位置

今回発見された大規模宅地は、十六町のほぼ中央に正殿が配されているものの、建物などの方位が真北から西へ振っており、長岡京造営の条坊地割とは異なった基準で成り立っていることが分かります。出土した土器は長岡京期より古い特徴を持っていることから、宅地の成立時期は奈良時代末～長岡京遷都後の間もない頃であり、長岡京の造営に関わるものと考えられています。そして、大規模宅地の性格は、正殿・西脇殿の建物規模や配置、築地塀を伴う区画の大きさから、かなり高位の人物の宅地であった可能性があります。



第14図 右京八条三坊十六町 周辺の調査地と遺構配置



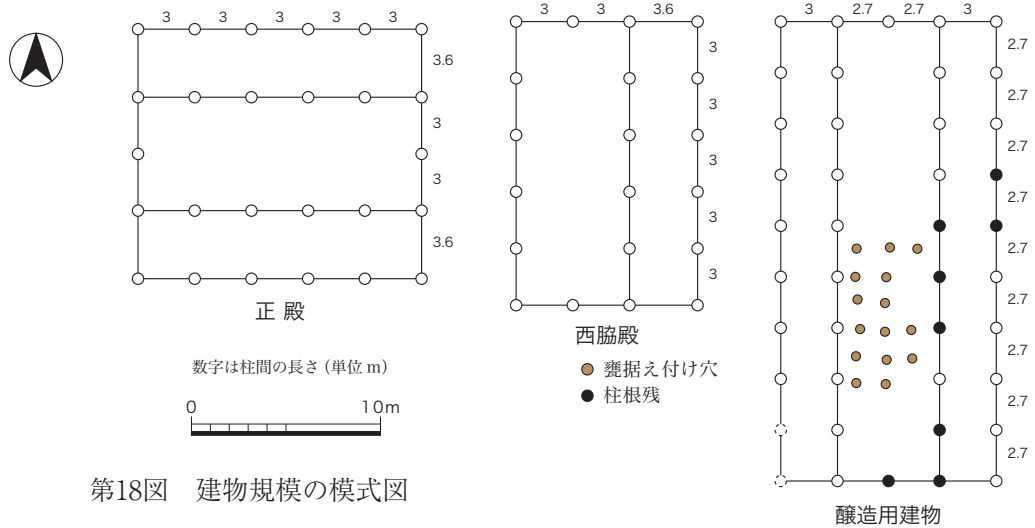
第15図 北上空から見た右京八条三坊十六町の建物群



第16図 正殿(南から)



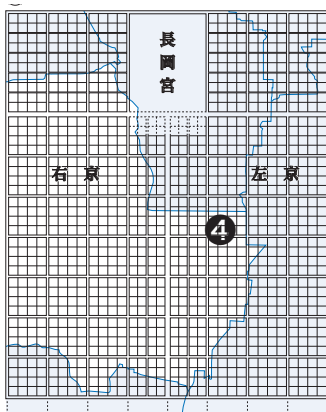
第17図 西脇殿(北から)



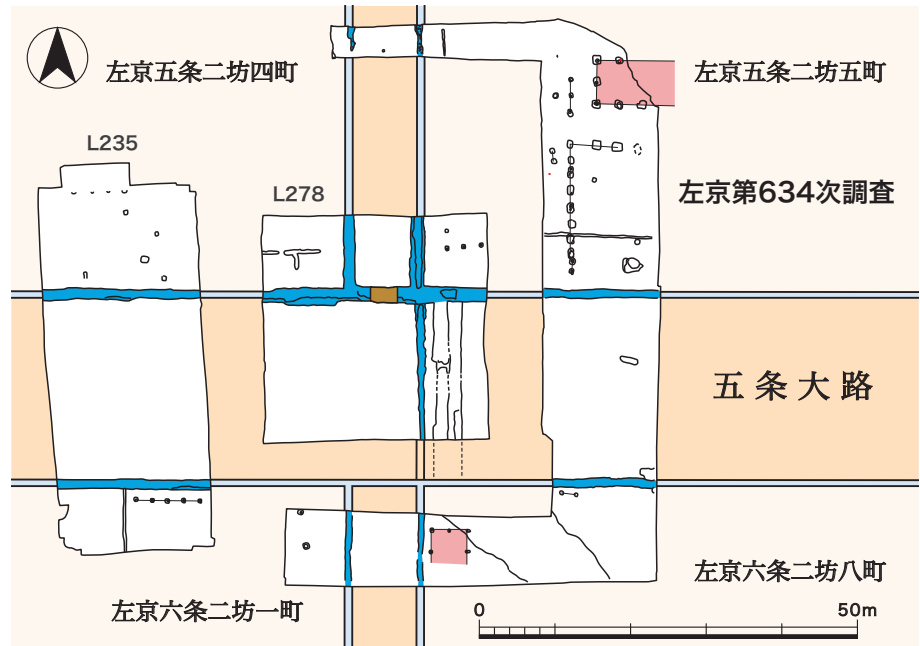
第18図 建物規模の模式図

#### ④左京五条二坊五町(左京第634次調査)

今年度、令和3(2021)年、長岡京市馬場で行った工場建設に伴う左京第634次調査では、東西棟と考えられる建物(東西2間以上・南北2間、柱間3m)と非常に大きな掘形を持つ塀が確認されました。建物は柱間3mの大規模なものですが、庇がないことから正殿より格が落ちる建物です。このため、今回の調査地より北東側に庇を備えた正殿や脇殿が存在するものと考えられます。



第19図 宅地の位置



第20図 左京五条二坊五町  
周辺の調査地と遺構配置

#### 参考文献

- ・長岡京市埋蔵文化財センター2021『長岡京の条坊道路と大規模宅地ー最近の調査成果よりー』
- ・長岡京市1991『長岡京市史資料編一』
- ・梅本康広他2002『長岡京跡左京北一条三坊二町』向日市センター報告書第55集
- ・小田桐淳2013『長岡京右京第365次調査』長岡京市埋蔵文化財センター資料選二
- ・山本輝雄1997『長岡京右京第22・25次調査報告書』長岡京市埋蔵文化財センター報告書第11集
- ・大高義寛2019「右京第1158次調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報平成29年度』
- ・福家恭2020「右京第1177次調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報平成30年度』
- ・岩崎誠2020「右京第1180次調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報平成30年度』







第 148 回埋蔵文化財セミナー資料

発行日 令和 4 年 2 月 26 日 (土)

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナーなどの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075) 933-3877 (代表) Fax (075) 922-1189

